

知求会ニュース

2014年5月

第50号

◎ 博士前期課程、入学おめでとうございます！

2014年4月8日(月曜日)午後3時から国際学部大会議室にて、2014年度オリエンテーションが開催されました。学長からの新入生へのメッセージは宇都宮大学 HP (アドレスは以下参照)に、掲載されています。

<http://www.utsunomiya-u.ac.jp/topics/2014/04/001440.php>

今年度の入学者は、国際社会研究専攻の第16期生 伊藤和也さん、亀井俊明さん、沢部清さん、蔣百蕙さん、倪欣萌さん、黄平凡さんの6名と国際文化研究専攻の第16期生 任曉艷さん、石薩日娜さん、赤羽聖史さん、王子朔さん、王立明さん、金ダへさん、呉程穂さん、周小琳さん、沈宇萌さん、白雨濛さん、白小琳さん、方婷婷さん、凌晨さんの13名、そして、国際交流研究専攻の第11期生 BRAVO KOHATSU JPSE RAULさん、HARUTYUNYAN KARINEさん、阿部優子さん、石川茂さん、王厚鈞さん、GUO JUNさん、孫文慧さん、CHU YUANさん、趙俊さん、趙美慧さん、橋脇倫さん、李海良さん、LIU XIAO BONさん、劉明明さんの14名で、計33名でした。

◎ 博士後期課程、入学おめでとうございます！

今春宇都宮大学大学院 国際学研究科博士後期課程に入学した張婷婷さん、石崎達也さん(国際文化研究専攻・第14期生)、金光一(国際交流研究専攻・第9期生)、胡哈斯其木格さん(国際文化研究専攻・第13期生)、陳佳敏さん(国際文化研究専攻・第14期生)と森谷亮太さん(国際交流研究専攻・第8期生)、進学おめでとうございます。今後の研究成果に期待したいと思います。(博士録24を参照)

◎ 着任教員紹介その20

栗原 俊輔 講師

氏名(英文)：栗原俊輔 (KURIHARA Shunsuke)

専門：Training of trainers、国際協力、市民社会、グローバル・ガバナンス

前職：JICA 専門家(2014年まで)、CARE USA(2008年まで)、ともにスリランカ

趣味：いわゆる鉄男

自己紹介：この3月に13年住んでいたスリランカより帰国し、4月に国際学部国際社会学科に着任いたしました。宇都宮大学(以下宇大)や宇都宮市はおろか、久しぶりの日本での生活もまだまだ慣れておりません。国際NGOであるCARE Internationalに10年近く関わり、東チモールでは緊急援助、その後スリランカの紅茶プランテーション・コミュニティのガバナンスとキャパシティ・デベロップメントに携わり、また直近ではJICA 専門家としてスリランカ内戦後の復興・開発アドバイザーとして戦後復興に関わってきました。元々は米国で Intercultural Communication や Training of trainers を学び Cross-cultural

Trainer をするなど異文化理解や研修トレーナーの分野が専門でした。最近ではスリランカの紅茶プランテーション住民を例に、構造的貧困解決のための、ガバナンスのあり方や消費者側コミュニティの責任と関わりを研究しています。宇都宮市は紅茶消費量が日本一と知り、宇大との運命を勝手に感じております。今後ともどうぞよろしく願いいたします。

立花 有希講師

氏名(英文)：立花有希 (*TACHIBANA Yuki*)

専門：比較教育学

前職：大学非常勤講師

趣味：料理、スポーツ観戦

自己紹介：ドイツの異文化間教育を専門に研究してきました。ドイツで移民背景を持っている児童生徒の教育について、特に言語的発達の視点から分析しています。日本の外国人児童生徒に関わる教育にも以前から関心がありながら、なかなか接点を持たずにいたのですが、宇都宮大学への着任を機に、HANDS プロジェクトなどを通じて出会いの場に恵まれることになりそうで、とても楽しみにしています。大学院では、「異文化間教育」という科目を担当します。異文化間教育に関する理論、政策、実践の展開を題材に、参加者の経験や興味をふくらませていけるような学習の機会にしたいと考えています。

出羽 尚講師

氏名(英文)：出羽 尚 (*IZUHA Takashi*)

専門：イギリス美術、文化

前職：大学非常勤講師

趣味：旅行

自己紹介：はじめまして、本年度4月に宇都宮大学国際学部国際文化学科に着任いたしました出羽尚（いずはたかし）と申します。栃木県とはこれまであまりご縁がなかったのですが（訪れたことも多分3～4回だけ．．．）、今回新しい場所に来ることになりかなり緊張しておりますが、いろいろな刺激を受けて私自身成長できればと思っております。どうぞよろしく願いいたします。

私はイギリスの美術を専門にしております。実は宇都宮にある栃木県立美術館は、イギリス美術の日本有数のコレクションを所蔵していることをご存知ですか？（私がこれまでに何回か栃木に来たのも美術館に行くためでした）特に私が専門に勉強しているターナーという19世紀のイギリスの風景画家の重要な作品も一点あって、海外のターナー研究者の間で TOCHIGI の名はそれなりに知られています。今回、宇都宮に着任したご縁を生かし、TOCHIGI の研究者と言われるよう頑張ります。

編集注：ジョゼフ・マロード・ウィリアム・ターナー (*Joseph Mallord William Turner, 1775-1851*)

◎ 掲載記事紹介

1. まちびあ 冬号 No.8 (平成 26 年 1 月 1 日発行) 1～3 面に、「特集 新春まちづくり対談 NPO 活動の質を高める地域経営という視点」の内容で、**北島滋**先生と**安藤正知**さん(国際社会研究専攻・4 期生)の記事が掲載されました。

◎ 国際学部だより

1. 平成 26 年度 第 1 回 シニア世代の地域デビュー講座の第 1 回で、**中村祐司**先生がテーマ「地域の魅力を再発見」で講演されます。開催日は 5 月 16 日午前 10 時から 12 時、会場は宇都宮市総合福祉センター (9 階 9A 会議室) です。対象は、おおむね 50 歳以上のシニア世代で、全 4 回参加可能な方で、参加には事前申し込みが必要です。問い合わせ先は「みやシニア活動センター」、電話番号 0 2 8 - 6 3 9 - 8 5 8 5 です。
2. UU now33 号 (平成 26 年 3 月 20 日発行) 4・5 面に、「特集 浴びる英語 EPUU」と題して、基盤教育センター副センター長の**江川美知子**先生が紹介されました。
(<http://www.utsunomiya-u.ac.jp/info/uunow/33/4-5.pdf>)
3. UU now33 号 (平成 26 年 3 月 20 日発行) 4・5 面に、「特集 浴びる英語 EPUU」と題して、**松原奈々**さん(国際文化学科・2 年生 掲載時)の記事が掲載されました。
(<http://www.utsunomiya-u.ac.jp/info/uunow/33/4-5.pdf>)
4. UU now33 号 (平成 26 年 3 月 20 日発行) 8 面の「Welcome to 研究室&ゼミ」に、「途上国経済発展論」と題して、**阪本公美子**先生が紹介されました。
(<http://www.utsunomiya-u.ac.jp/info/uunow/33/8-9.pdf>)

◎ 宇都宮大学公開講座 (地域連携教育研究センター主催) 有料

- | | |
|--------------------------|-------------------------------|
| 1. 韓国語講座 | 丁 貴連 先生(コーディネーター) |
| 入門コース・初級コース・中級コース I | 金 多希 (国際文化研究専攻・第 8 期生) |
| 中級コース II | 崔 寶允 (国際社会研究専攻・第 9 期生) |
| 2. シャーロック・ホームズの世界に遊ぶ | 大関清太 工学部名誉教授 |
| | 高際澄雄 国際学部名誉教授 他 |
| 3. 明治42年生まれの作家たち(夏期)(秋期) | 小池清治 国際学部名誉教授 |
| 4. グリムの昔話と日本の昔話を共に考える | 橋本 孝 国際学部名誉教授 |
| 5. 里山で楽しむランブリング | 平井雅世 (コーディネーター) |
| | (国際社会研究専攻・第 4 期生) |
| 6. 文明と世界 | 神長善次 元国際学部客員教授 |
| 7. タイ料理入門 抽選 | タイ料理研究家 泉田スジンダ 先生 |

詳細は以下のHP をご覧ください。

(http://www.utsunomiya-u.ac.jp/cercc/course_list.html)

○刊行案内

国際学部と国際学部附属多文化公共圏センターより4月上旬に、多文化公共圏センター年報第6号212頁が刊行されました。目次を以下に記します。(敬称略)

はじめに

高際澄雄

巻頭エッセイ 古典を読み、ここにいない人とともに

—嶋長明『方丈記』について

田口卓臣

I 特集：グローバリゼーションと公共圏

「2020年東京五輪がもたらす『スポーツグローバル公共圏』の課題」

中村祐司

「グローバル時代における国家と市民社会間の公共圏を考える

—カンボジアの政府とNGOを事例に—

重田康博

「日本における多文化公共圏の確立をめざして

—国際学部の果たすべき役割に関する一提案—

高際澄雄

II 福島乳幼児・妊産婦支援プロジェクト

1 福島乳幼児・妊産婦支援プロジェクト(FSP) 2013年度活動報告

2 2013年度 栃木県へ避難している方へのアンケート集計結果(2013年12月20日)

3 2013年度 震災後の栃木県北地域における乳幼児保護者アンケート集計結果報告

4 原発震災後の被災家族の現状と課題

—福島・北関東・新潟の乳幼児・妊産婦世帯へのアンケートに基づいて—

5 「原発震災から再考する開発・発展のあり方」研究部会

2013年度活動報告・2014年度活動計画

6 「原子力災害による被災者支援施策パッケージ」に関する再要望事項

III 活動報告

1 国際開発学会第14回春季大会(宇都宮大学)

2 水俣から栃木にて学ぶ —水俣病受難者の方々の体験と足尾鉍毒事件・原発震災—

3 連続市民講座「多文化共生について考える」VOL.8

4 第5回グローバル教育セミナー 「子どもの貧困とグローバル教育」

5 宇都宮大学生国際連携シンポジウム2013

「ASEANから相互理解・相互協力を学ぶ～日本の進むべき道を考える～」

6 平成25年度宇都宮大学地域連携活動支援事業 田中正造没後100年記念シンポジウム

「田中正造とアジア」

7 中東理解セミナー 中東における人口移動の政治・経済・地理

—シリア、パレスチナ、レバノン、湾岸諸国の比較研究—

IV 論文・報告等

投稿論文

「栃木県の小中学校現場における国際理解教育の現状と課題

～アンケート調査から見えてきたもの」

若林秀樹

- 「孤族社会における韓流ドラマ」 崔 寶允
- 「国際理解教育の概念再構築における課題
—英国の市民教育推進との比較をもとに—」 根本久美子
- 「ルックイースト政策30年の功罪と今後の課題
—何故、ルックイーストは在馬日系R&Dで役に立たないのか?—」 岡本義輝
- 視察報告
- 「宇都宮大学グローバル人材育成のための事前調査 重田康博
—スリランカを訪問して—」 福村一成

V 関連資料

- 1 センター組織と活動記録
- 2 センター年報発行要綱
- 3 新聞記事
 - ・「遊水地端緒に教訓探る」
 - ・「水俣病患者 魂の訴え」
 - ・「子どもの貧困に目を」
 - ・「朝鮮人への偏見 正造は別」
 - ・「「言葉の壁」サポート」
 - ・「外国人生徒の進学 高校入学後のケア必要」
 - ・「夢目指し、高校進学を」
 - ・「外国人の子ども 教育の連携必要」
 - ・「支援法、早期実行願う」
 - ・「子ども・被災者支援法 基本方針に当事者の声を」
 - ・「園児被ばく不安8割超」
 - ・「国の対応「差別と分断」」

第50号発行記念特集

今回は「知求会ニュース」第50号発行を記念して、歴代研究科長の鯨井佑士先生と北島滋先生に寄稿をお願いしました。また、長らく非常勤講師としてお世話になった石澤良昭先生にも寄稿をお願いしました。

基礎知識1（歴代研究科長および国際学部長）

- | | |
|--------------------|----------------------------|
| 初代国際学部長 | 西村文夫先生（平成06年10月～平成09年3月） |
| 2代国際学部長 | 鈴木博先生（故人）（平成09年4月～平成11年3月） |
| 3代国際学部長（初代国際学研究科長） | 鯨井佑士先生（平成11年4月～平成13年3月） |
| 4代国際学部長（2代国際学研究科長） | 藤田和子先生（平成13年4月～平成17年3月） |
| 5代国際学部長（3代国際学研究科長） | 北島滋先生（平成17年4月～平成21年3月） |

- 6代国際学部長（4代国際学研究科長） 岡田三郎先生（平成21年4月～平成23年3月）
7代国際学部長（5代国際学研究科長） 内山雅生先生（平成23年4月～平成25年3月）
8代国際学部長（6代国際学研究科長） 田巻松雄先生（平成25年4月～現在）

基礎知識 2（知求会）

知求会は第2期生が修了した2002(平成14)年3月26日に創立しました。当初、国際学部同窓会への入会を考えましたが、規約上の問題で社会人学生などの入会がかなわず、宙に浮いた1年を過ごしました。当時の入学者は国際学部卒業生が多く、会費の二重負担を懸念して大学院同窓会の否定論が多数を占めていました。このような経緯から会費未徴収という立場をとらざるを得ませんでした。

2014(平成26)年5月現在で、修士課程および博士前期課程の入学者累計は393名、博士後期課程入学者は36名です。また、修士課程および博士前期課程の修了生は311名、博士後期課程の修了生は12名です。（知求会事務局調べ）

特別寄稿 1

「国際学部設立秘話」

国際学部名誉教授 北島滋（2009年退職）

国際学部が設立されて20年、時間がたつ早さに驚いてしまいます。私は新学部が構想された1991(平成3)年くらいから関わっていました。当初はどちらかというところ<雑用>をおうせつかったという感じでした。というのは、研究者としては旬の45歳でしたから、雑用よりは研究という意識が強かったですね。当時科研費も当たっていましたから。

1. 国際学部設立の前段階

私が赴任してきた1983(昭和58)年の段階でも新学部設置の動きがありました。1970年代の前半だと思いますが、宇都宮大学は他大学と比較して学生運動の解決が長引いたこともあり、せっかくなついた文部省（2001(平成13)年文部科学省）の新学部に関する調査費を返上した経緯があります。調査費がつけば新学部設置の可能性は大きくなるのですが。その時の案は人文社会科学部でした。岩手大学にその学部が1977(昭和52)年に設置されました。人文社会科学部案の芽はほぼなくなりました。

その後の宇大には理学部構想とか種々あったようですが、当時の行政改革の影響等で実現できませんでした。宇大は教員養成の教育学部はありますが、人文社会科学系の学部がないということもあり、その実現が悲願であると先輩の教員から聞かされた経緯があります。私は当時教養部所属（1994(平成6)年10月国際学部設立と同時に解体）でしたから、学長選挙のたびに教養部長に新学部案を作れという命令があったことを覚えています。既存学部を改組・解体して新しい学部を設置することは教員の抵抗が強くて不可能ですから、新学部設立の母胎は、新学部に対する希望が強かった教養部にならざるを得なかったわけです。私の研究室（A棟5階）の隣が白井教養部長（故人）の部屋でしたから、日曜日返

上で総合科学部案を作っていたのを覚えています。当時の状況では実現可能性はゼロとだれもが思っていました。それに学長選がらみのポーズだということも世間に疎い私にさえわかりましたからね。しかしやがて私が新学部案作成に加わるとは思いもよりませんでした。

2. 国際学部設置に向けての新たな動き

1991(平成3)年6月、大学設置基準の大綱化(教養教育の規制緩和)が実施され、これに伴い全国の国立大学(特に教養部が設置されている)では新学部設置に向けて大きく動き出しました。教養部を母胎にした新学部設置に向けた動きは宇大も同様であり、当時の津布楽学長が大綱化を受けて新学部設置に動き出しました。

当然学長からの指令は教養部に來ます。当初案は総合科学部等の既存案から抜け出ていなかったように思います。教養部は人文・社会・自然・体育系の教員で構成されていますから、それを基礎にするとどうしても前記した案になってしまいます。私も県内の高校生に向けた新学部必要度調査を指示されました。社会学の調査をしているから引き受けるのは当然でしょうということでしょうが。県の教育委員会に行って許可を取り、各高校に行って調査票の配布回収をお願いしました。学校調査の回収率は100%ですから、約1000票ではなかったかと思えます。質問項目は、人文社会科学系の新学部が必要という方向に導くつくりをしました。否定的な回答が出るようでは困りますから。新学部を作ろうとした全国の大学はこの種の調査を必ずします。文部省側も地域からの要望はどうなのだと必ず聞いてきますから。文部省もこの種の調査がやらせっぽいということは知っていたでしょうね。問題はデータ処理です。実験系教員ということで私の予算も潤沢でしたから50万円もするカード・リーダーを購入しました。ところが当時は動かすソフトがついていませんでしたのでプロの片桐先生(心理学担当)にお願いして接続ソフトを作成してもらい、今は懐かしいワン・ツー・スリーの統計ソフトで処理を行いました。

3. 国立大学における新学部設立の難しさ

私立大学が新学部を作る場合、まず青写真を作り、それに合わせて必要な教員を新規に採用し配置します。もちろん必要があれば他学部から教員を移動させることもするでしょう。国立大学の場合予算が決められているため、

- (1) 青写真は作りますが、まず教養部の既存教員の配置を優先します。
- (2) それでも不足する場合は他学部からの移動、あるいは新規採用になります。
 - 1) 新規採用は予算上ほとんどできないので、他学部から空きポスト(当時は工学、農学部で多少保持)を提供してもらおう。しかしこれは当該学部が使うということ前提にしていますのでほとんど不可能。
 - 2) 他学部からの移動は当該学部で担当している科目が欠落しますし、本人の同意が必要ですから極めて困難
 - 3) 当該学部の教員の移動は自分の学部の教員の減少に直接つながるので同意しないというわけで国立大学の場合、大規模大学なら教員の空きポストに多少余裕があります

から新学部の設置は可能でしょうが、宇大は単科大学ではありませんが、＜中規模の下＞ですから空きポストの活用は至難の業です。旧 7 帝大を中心とした大規模大学は大学院の拡大に、中・小規模の大学が新学部の設置に動いたというのが実態ですが、大規模大学では神戸大学国際文化学部、京都大学人間総合学部、名古屋大学情報文化学部を設置しました。あとは中小規模の大学ですが、新学部設置に成功したのは長崎大学環境学部、岡山大学環境理工学部、静岡大学情報学部、群馬大学社会情報学部、そして宇大の国際学部くらいでしょうか。

4. 国際学部設立に向けた新学部案の構想・作成

1992(平成 4)年だと思いますが、松木先生(静岡大学転出)を中心としたグループで新学部案が構想されていました。当初案は人文社会科学部・総合科学部をベースとして構想されていたように思います(記憶があまり定かではありませんが)。松木先生が静岡大に転出し、そして片桐先生がアメリカに留学が決まり、1993(平成 5)年 3 月に急遽北島に新学部案作成のお鉢が回ってきました。私は高校生向け調査の協力には加わりましたが、本体合流(教養部新学部設置委員会だったと思いますが)にはいささかとまどいましたし、および腰でした。委員長は当時の教養部長中村先生(農学部に移動)でした。当時の委員の構成をあまり記憶していないのですが、中村教養部長、鯨井先生、渡辺先生、大関先生(教育学部に移動)……。

どのような案にするかで議論をしたのですが、神戸大学が国際文化学部を設置するという情報は既に入ってきており、時代を見据えた新しさを加味すべし、というのが委員会の総意だったと思います。栃木県という地域性を当然顧慮しました。県内では工業化が進んでいて外国人労働者が増加し、かつ東京圏への組み込みが進展していました。当時は既にグローバリゼーションという概念は当然ありましたが、どちらかいうと国際化の方が一般的でした。委員会は国際化を学部案に組み込むことにしました。

当初の学部名は国際社会文化学部でした。立派なパンフレットも作成したのですが、全学の新学部設置の委員会で、なに、それ?太陽神戸三井銀行みたい、と揶揄されました。当時三つの銀行が合併しその名前が使われていたからです。前記名称を採用したのは、学部内容がどうしても教養部教員の専門性(社会科学、人文分野)に左右されたからです。

1993(平成 5)年 4 月から文部省交渉が始まりました。説明役は北島でしたが、聞き役の若手文部官僚は説明なんか聞いていません。黙々と資料に付箋を貼り、説明が終わると若手官僚が質問してきます。彼らは全国の大学の新学部のデータを頭に入れて質問してきますので、応答は大変でした。今でも記憶しているのは、＜なぜ栃木県に国際系学部なの、横浜、神戸ならわかるけど＞、それと、＜ギリシャ文化と国際経済を学んでどんな人材ができるの＞、でした。これは正直難問ですね。さらに釘をさされたのは、新学部の設置は＜全学的再編＞が絶対条件であることでした。毎月だったと思いますが、宿題への回答案ができると虎ノ門の文部省参り、結局、出されてくる宿題の回答に 1 年間通い続けました。

5. 学長のリーダーシップと学内の反応

全学的再編ということですから、各学部の同意を得る必要があります。全学の委員会で学長を中心に説明するのですが、各学部長の反応は様々でした。工学部はいつも新学部設置は<時期尚早>の一点張りでした。農学部は新学部構想に比較的好意的だったように思います。教育学部は、文部省が少子化対応で教員養成課程の学生定員を削減する方向で動き、その関係で教育学部に教員免許を取得しなくても卒業できる<零免コース>が設置されていました。津布楽学長はこのコースの学生定員（60名？）を新学部に移すと主張しましたので、教育学部の内部では強い反対があったと思います。全学的再編ですから、各学部から学生定員と教員ポストの抛出が不可欠です。しかし実際に出すとなると好意的な農学部でも強い反対がありました。

当時の津布楽学長は全学の委員会・評議会で何度反対されても間髪入れず会議を招集し相手が根負けするまで一步も引きませんでした。この機会を逃したら新学部は永久に設置ができないと認識していたからだと思います。その後の歴史は学長の考えた通りに経過しました。こういう方を<強いリーダー>というのでしょうか。プランを作る私たちからすれば非常に頼もしい学長さんでした。私は今でも強い尊敬の念を持っています。でも各学部からは嫌われていたでしょうね。

結論から言えば、津布楽学長は全学の反対を押し切って、各学部から教員ポスト各 2、農学部、工学部から学生定員各 10 名、そして教育から 60 名を抛出することに決めました。結果的には工学部は学生定員 10 名を抛出せず、代わりに教育学部からさらに 10 を抛出させ、教員ポスト合計 6、学生定員を 80 名確保しました。これに対応して新学部の設置が決まれば教養部を改組・解体しますので、自然科学系、体育系、語学系の教員を希望に則して各学部に移動するプランを大木教授（故人・工学部移動）が中心になって作りました。今から思えば見事な全学的再編でした。

6. 国際系学部のその後の変転

国際社会文化学部は構想の弱さ、つまり教育体系がつぎはぎだらけ、したがって人材養成も明確でないということで再検討ということになりました。委員会は新たに国際関係学部構想を打ち出し、構想が内弁慶ではなく外部から見ていただくということで大関先生と二人で W 大学の O 教授（設置審議会の委員名は秘密なのですが、委員名のリストは全国の大学では周知の事実）に相談しに行きました。彼は即座に外交分野の教員が欠落しているのでダメ出し宣言をされました。教養部母胎の学部構想の弱さからどうしても抜け出せませんでした。発想を転換して、明治学院、文教大学の国際学部を渡辺先生、杉原先生と調査に行きました。文教大学の国際学部は内容が観光学科でしたのでこちらは諦め、明治学院大のカリキュラムは我々が構想してきた内容にマッチしたので、学長等と協議し、国際学部の方向で進めることの同意を得ました。再度 W 大学の O 教授に相談したところこれなら大丈夫、というお墨付きを得ました。全学の同意も得たうえで、1993(平成 5)年 5 月文部省との最終交渉に臨みました。その時の案は

- (1) 教育体系（人材養成）・・・国際理解を基礎に国際問題への柔軟な対応力
- (2) 学際性・総合性・・・国際社会学科、国際文化学科の垣根を低くし、学生は所属学科以外の単位の取得を容易にする
- (3) アジアの重視・・・社会系、文化系にアジア関連の教員を可能な限り拡充。但し欧米圏の教育も重視する。
- (4) 多言語重視・・・英語の習得は当然であるが、他の言語も修得
- (5) 演習を重視し、4つの演習を履修させ学際性・総合性を強める

文部省側はこの案で一応了承しましたが、その後6月、7月となしのつぶてでした（これを後に空白の2ヶ月と呼びました）。学長以下やきもきました。この間、学長は栃木県選挙区選出の文部大臣に陳情もしましたが、8月の暑い盛りに文部省側から認可の内示が来ました。この時だけは1年以上に及ぶ苦勞が報われましたから関係者は大喜びしました。

文部省とはこの1年間は敵同士でしたが、一度内示が出ると<昨日の敵は今日の友>です。しかし喜びもつかの間、文部省は大蔵省に新学部設置の予算化を説得するためにもものすごい量の質問への回答・資料を要求してきました。夏から初秋にかけては次年度予算の概算要求の取りまとめ時期ですから、中央省庁の官僚たちは夜も寝ないのでしょうか。委員会の先生方も対応に追われて毎日午前2時くらいまでは大学にいました。とりわけ鯨井先生はホテル代が高くついたのではないかと思います。

7. 顛末記

あれから20年たとうとしています。1993(平成5)年の秋から文部省への対応で明け暮れしましたが、その過程で国際学部の人事も進みました。文部省側から学部のキー・パーソンを、ということで初代学部長の西村先生（静岡県立大：ロシア政治経済専門）、鈴木先生（故人・東大：PCを使用した英語教育）、田所先生（故人・朝日新聞：中国政治専門）が招聘されました。その他非常勤にはアジアとヨーロッパ関係ご専門の木畑先生（東大、現成蹊大）、足銀会長向江先生（故人）などそうそうたるメンバーをお迎えしました。これらの先生方のご努力もあって、国際学部の発展があったのだと思います。なんといっても、一番の貢献は国際学部の設置を事務方が支えてくれたことです。本部も毎日夜中まで作業していました。過勞死が出なかったのが不思議なくらいです。当時のN事務局長さんは仕事はできましたが、なかなかのワンマンで苦勞した事務職員の方も多かったようです。

文部省側とのやり取りも一段落したので、私はこの仕事からようやく足を洗えると思い込んでいましたが、当時の教養部事務長の植木さんが毎日、はい、この書類作ってと足しげく通ってきました。高血圧、高血糖値の遠因はここにありますね。学部づくりのプロにはなりましたが、もう2度とこんな仕事はしたくないというのが当時の心境でした。それでも学生定員20名（学部定員100名）、教員2名が文部省によって<プレゼント>され、1994(平成6)年10月、国際学部が正式に設置された時は喜びが倍增しました。

(2014年3月27日原稿受理)

特別寄稿 2

「国際学部の創設と国際学研究科設置の頃」

国際学部名誉教授 鯨井佑士

土屋会長より国際学研究科設立の頃の思い出を何か書いてほしいという依頼がありました。学部創設および研究科設置の経緯などについて少し書いてみましょう。

今秋は、国際学部設置20周年、大学院設置16周年を迎えるとのこと。大学院の基となった国際学部は1994(平成6)年10月に設置されました。宇都宮大学は、それまで、教育学部、工学部、農学部の3学部構成で、文化系の学部が欠けていました。大学全体をよりバランスのとれた形にするため、人文社会系の新学部を設置することが、大学の長年の懸案であり、また同時に県民の強い要望でもありました。教養部の設置(1968(昭和48)年)直後から、新学部設置の動きはあり、何度も新学部設置構想が生まれたのですが、いずれも実現せずに終わっています。とかくするうちに、臨教審の答申に基づき、大学設置基準の大綱化が実施されることになりました(1991(平成11)年)。これが、国立大学の体制を大きく変えて行くこととなります。一番顕著な動きが、教養部の改組と新学部の設置で、全国の大学が、これに向けて一斉に走り出しました。宇都宮大学もこの流れに乗り、旧帝大を除くと、全国で5番目に新学部を設置することができたのです。大学としては、言わば、20年来の「悲願」が達成されたということになります。

このときの苦労はいろいろありますが、長くなりますから、またの機会に譲ることにしましょう。これに比べると、大学院の設置は、ずっと楽でした。後でわかったことですが、宇都宮大学国際学部のような、教養部を改組して作った「新構想学部」には、完成年度に修士課程を設置するというのが、文部省の基本方針であったからです。研究科が設置されたのは1999(平成11)年ですが、図らずも、このとき、私は、3代目の学部長、初代の研究科長に選出されました。

何ぶん初めて経験することですので、教員側には、設立当初、いろいろと戸惑いや苦労があったのですが、なかでも、修士論文の指導のことが一番大変でした。それぞれの先生方が、自分のゼミで、どのように学生を指導するか、苦心したことと思います。論文審査の方法についても、議論を重ねた末、主査(指導教員)と二人の副査による方式が確立していきました。このようにして、2001(平成13)年には、初めての研究科修士課程を無事送り出すことができました。その後、研究科設置から8年後の2007(平成19)年には、博士後期課程も設置されました。大学院として一貫して教育する体制が整ったわけで、まことに喜ばしいことです。

さて、現在、国立大学法人は、いずこも、さまざまな困難に直面し、変革の嵐にさらされていると聞いております。どうか、学部創設当初の精神を大切にして、困難を乗り越えて行っていただきたいと思います。願っています。

(2014年4月20日原稿受理)

特別寄稿 3

「民族の価値体系と国際交流 ―多様化する文化と国際交流―」

上智大学教授 石澤良昭

グローバルゼーションという言葉が語れることが多くなりましたが、世界の現状を見ますと、いまだ世界はいわゆる国民国家を単位として構成されております。しかし、それぞれの国にはそれぞれの民族の歴史があると同時に、古来より現代に至る各民族間の接触の積み重ねがあります。これらの諸要因が現在の世界を形作っている各国の文化の形成、また価値観にも影響を与えていると思われまます。

各国における固有の民族的価値観と、古くからの歴史的経緯やまた近年のグローバルゼーション等の影響から、これらの国に内包されることになった異文化の、固有の価値観にもたらす問題について分析を加えるとともに、その解決の方向性、あるいは対処の方法について考察を重ねていくことが重要であります。また、欧米諸国でとくにこれまでに標榜されてきた多文化主義についても、現状とその可能性について検討する必要があります。関連する最新のトピックについてたくさん集積し、検析を行なうことが肝要です。

欧米やアフリカでなんらかの暴力的な事件が起こるたびに、多文化主義についての論議が巻き起こりますが、その底流には何があるのか、またどのような解決の糸口があるのでしょうか。単に、政治的・経済的方法による弥縫策的な対処だけでは、基本的な解決には結びつかないように思われます。それを探り、仮説を組み立てていく研究作業が国際学部卒業生、国際学研究科修了生に求められていると思います。もしかすると、国際文化的な接近法が一つの回答になるのかも知れません。

今後はグローバルゼーションの中で、各国の民族的価値観がどのように影響を受けているか、現状を情報として捉え、報告するとともに多文化主義の方向性について一つの回答を立論していくことが重要です。

(2014年4月25日原稿受理)

博士録 24 第 22 号から今後の博士誕生を鑑み、新コーナーを設けました。第 24 回目には張 婷婷さん、石崎達也さん、金光一さん、胡 哈斯其木格さん、陳 佳敏さんと森谷亮太さんにお願ひしました。

氏名：張 婷婷 (チョウ・テイテイ)

出身大学院：中国 ハルビン理工大学 日本文学科

専門：比較文学

所属研究室：梅木由美子研究室

趣味：音楽鑑賞

研究テーマ：「俳句と漢俳の比較に基づく俳句翻訳の諸問題の考察」

自己紹介：今日から、国際学研究科博士後期課程で勉強することになりました張婷婷と申

します。修士の時、代表的な日本文化の一つと言える俳句に興味を持ったことから、中国における俳句の受容の表現の一つであり漢俳と俳句を研究対象にしました。「俳句の詩趣を理解するためには、少なくとも読者自身が、日本の紙の家に住み、畳の上に坐り、味噌汁を啜り、緑茶を飲み、そして尚且つ、日本の先祖代々の伝統する文化に生活せねばだめである。」と詩人 萩原朔太郎(1886-1942)の言葉にありますように、俳句の神髄に身をもって体験するため中国から参りました。これからも異文化の視点から俳句の翻訳に関わる諸問題の解決を目指して研究し続けていきたいと考えていますので、知求会の皆様、どうぞ宜しくお願いいたします。

(2014年4月20日原稿受理)

氏名：石崎達也 (いしざき・たつや)

出身大学院：宇都宮大学大学院 国際学研究科 博士前期課程 国際文化研究専攻

専門：英語音声学

所属研究室：湯澤伸夫研究室

趣味：旅行

研究テーマ：「日本語母音と英語母音の音響的特性の比較及び

音響音声学に基づいた日本人学習者に対する英語発音教育法に関する研究」

自己紹介：博士前期課程における研究では、特に英語母音 /l/ についての日本語話者向けの新しい発音方法を考察し、主にフォルマント周波数を使用して、その発音方法の妥当性評価を行いました。博士後期課程においては、全ての英語母音についての新しい発音方法を他の音響的要素をも考慮しながら考察し、総合的な結論を導きたいと考えます。

以前、東北大学大学院修士課程において、応用物理学を専攻し修了しました。そこで新たな物理現象の研究及び対外的な発表手法を学びました。その後、某電気メーカーで半導体製品の開発に携わりました。

社会に役立つものを創り出すことや特許のような新しいアイデア創出の重要性を学びました。この経験は、博士後期課程における音響的特性の研究や、英語学習者の発音向上に寄与し得る新しい発音方法の検討に役立つものと考えています。本研究により、日本語話者の英語発音能力の更なる向上に寄与したいと考えます。

(2014年4月15日原稿受理)

氏名：金光一 (キム・クァンイル)

出身大学院：宇都宮大学大学院 国際学研究科 博士前期課程 国際交流研究専攻

専門：比較文化

所属研究室：丁 貴連研究室

趣味：バドミントン、スノーボード、音楽鑑賞など

研究テーマ：「ドラマが映し出す現代社会 -セリフ分析から見る日韓の社会と文化-

自己紹介：韓国から参りました金光一と申します。現在、宇都宮大学大学院博士後期課程に在籍しており、日韓両国の比較文化研究を行っております。私は、交換留学生として1年、研究生6ヵ月、博士前期課程2年、併せて3年半くらいの時間を宇都宮大学で過ごしてきたので、私にとって宇都宮大学はとても大切なところだと言っても過言ではありません。これから3年、あるいはそれ以上の時間をまた宇都宮大学で過ごせるようになり、とても嬉しいです。辛くて大変なこともたくさんあるだろうと思いますが、黙々と頑張っていきたいと思っております。よろしく申し上げます。

(2014年4月21日原稿受理)

氏名：**胡・ハス其木格** (コ・ハスチムガ)

出身大学院：宇都宮大学大学院 国際学研究科 博士前期課程 国際文化研究専攻

専門：歴史学

所属研究室：松金公正研究室

趣味：読書、水泳、旅行

研究テーマ：「モンゴルにおける近代衛生概念・医療技術の移入過程に関する歴史的研究」

自己紹介：私のことハスチムガと呼んでいただくとうれしいです。中国・内モンゴル出身、モンゴル族です。

私の研究では、「モンゴル」を4つの地域に分けて研究を進めて行きたい。それぞれ満洲国の版図内にあった東部内モンゴル（興安蒙古、満蒙）、蒙疆政権（蒙古連盟自治政府、蒙古連合自治政府、蒙古自治邦政府）支配下の中部内モンゴル、満洲国成立後も引き続き中華民国が実行支配した西部内モンゴル、及びボグド・ハーン政権を経てソ連の影響下で独立した外モンゴルが考察対象地域となる。

この地域では、近代衛生・医療の伝達ルートが4つのパターンに分けられることが想定される。満洲国に管轄される東部内モンゴルでは、台湾・朝鮮での植民地統治の経験を採用する形で日本によって近代衛生・医療が伝達され、それに隣接する中部内モンゴルでは、日本の官民によって設立された財団法人善隣協会が蒙疆政権と連携して衛生・医療事業を展開した。西部内モンゴルでは、中華民国中央政府、及びその地方政府によって、また、外モンゴルでは、独立を援助し長期にわたって影響を与え続けたソ連によって衛生・医療が伝達されたと考えられる。

本研究では、日本、中華民国、ソ連の政治的力によって分断された「モンゴル」という地域に、近代衛生概念や医療技術がどのようにもたらされ、それぞれの地域に存在していた旧来の衛生概念や医療技術といかに接触し、それらを変容させつつ、受容されていったのかということと比較検討していきます。そして、これらのことを通じて、「モンゴル」にとって、近代衛生概念や医療技術の移入というものがどのような歴史的意義をもつものであったのかということ初めて明らかにできると考えています。

立派な研究者なるように頑張りますので、皆様どうぞよろしく願いいたします。

(2014 年 4 月 25 日原稿受理)

氏名：陳 佳敏 (チン・カビン)

出身大学院：宇都宮大学大学院 国際学研究科 博士前期課程 国際文化研究専攻

専門：日本文学

所属研究室：丁 貴連研究室

趣味：読書、旅行、映画

研究テーマ：「中島敦後期作品の研究 ―中国思想の受容を中心に―」

自己紹介：私は2010年4月中国寧波大学からの交換留学生として来日し、本学国際学部で日本語と日本文学を中心に1年間研修を受けました。その後寧波大学を卒業後、2011年10月に国際学部の研究生となり、2012年4月に国際学研究科博士前期課程国際文化研究専攻に入学し、2年間の研究を終えた後、博士後期課程の入学試験を受け、無事合格できました。

修士論文では、中島敦の植民地体験と彼の文学世界について研究を進めてきました。今後中国思想に深く影響を受けていた中島敦のもう一つの側面を浮き彫りに研究を続けるつもりです。これからもどうぞよろしくお願いいたします。

(2014 年 3 月 25 日原稿受理)

氏名：森谷亮太 (もりや・りょうた)

出身大学院：宇都宮大学大学院 国際学研究科 博士前期課程 国際交流研究専攻

専門：色覚異常問題論、東西比較文化論、異文化コミュニケーション教育

所属研究室：ライマン・研究室

趣味：飛行

研究テーマ：「Raising Cross-colour-vision Tolerance: A Comparative Socio-linguistic Study of Cross-cultural Communication Pedagogy for Colour Vision Deficiencies」

自己紹介：「色覚異常のパイロット」と聞いて、皆さんはどのようなイメージを抱くでしょうか？

実は、私自身が「色覚異常者」で「パイロット」なのです。専門として記入した「色覚異常問題論」は、「日本では航空身体検査不合格、カナダでは合格」という実体験から発した、私のライフワークともいえます。修士論文では、加日比較文化論のアプローチから、日本の航空身体検査基準の隠れた「色覚異常の文化的タブー」という面を明らかにしました。博士後期課程では、分析対象を社会・文化的マイノリティに広げ、「色覚異常者」を含む異文化間での相互理解を目的としたコミュニケーションを実現するための能力の定義と、その教授理論を明らかにしたいと考えています。研究と教育を通して、「色覚異常者」を含むあらゆるマイノリティの人々が、「自らの生を肯定し、夢を持つことができる社会の実現」に、理論と実践の両面で貢献することが後期課程での目標であり、私の夢です。

(2014 年 3 月 25 日原稿受理)

博士録 25 第 22 号から今後の博士誕生を鑑み、新コーナーを設けました。第 25 回目には田巻研究室 OG の金英花さんにお願ひしました。

中国朝鮮族の国際的な移動と子どもの教育

— 出稼ぎの変容と留守児童の問題から見る家族生活 —

金 英花

本論文の課題

1990 年代から始まった中国朝鮮族の韓国への出稼ぎブームは、20 年を経て量的にも質的にも大きな転換を迎えている。大量の移動は家族分散を招き、家族という概念もこれまでに以上に複雑で多岐にわたる形態を見せている。移動がもたらす家族構造の変化が残された家族や子どもへの影響が極めて大きい、その分離の形も多様であり、それがもたらす問題への対処や適応の過程もさまざまである。それは一部の地域の問題に留まらず、朝鮮族の家族のあり方に根本的な変容をもたらす可能性も否めない。

本論文ではこうした問題意識から出発して、韓国における受け入れ政策の変遷、出稼ぎの変容、留守児童問題、そして送り出し社会の取り組みという 4 つの論点から、送り出し社会と受け入れ社会における出稼ぎの現在を明らかにしようと努めた。更にそれを通じて子どもの教育をめぐる家族や社会の戦略を浮彫りにし、出稼ぎを通じて朝鮮族が経験している家族の変容と複雑な家族生活の一側面を捉えようと目指した。

論文の構成と内容

本論文ではトランスナショナル論の概念を視野に入れながら研究を進めた。使用したデータは主に韓国と中国で各 2 回ずつ行ったアンケート調査とインタビュー調査によるものである。具体的な内容は以下の通りである。

第 1 章では、先行研究を踏まえながら、研究の課題と意義について提起し、本論文の全体的な構想と理論的な枠組、概要を提示した。第 2 章では、1990 年代から今日に至るまでの韓国政府の朝鮮族に対する受け入れ政策の変遷について論じた。第 3 章では、出稼ぎ先での親の就労状況と生活に着目して、受け入れ政策に伴う出稼ぎの変容を捉えた。更には出稼ぎの長期化の原因について追究し、それはまた家族と子どもの教育にどのように反映されているかを検証しようと努めた。第 4 章では、親の出稼ぎにより、本国に残された子どもの教育へ及ぼした影響について、中国・龍井市の事例を中心に、留守児童の現状と問題点を明らかにした。第 5 章では、一連の変化と影響を受けて、送り出し地域の行政と社会は留守児童の問題にどのように向き合ってきたかを論じ、家族と社会の戦略を浮彫りにし、家族分散の中、子どもの教育の可能性を見出した。第 6 章では、全体をまとめ、朝鮮族の家族の変容について、トランスナショナルな生活について解釈を行った。

博士号を取るまで

—本気ですれば、必ず成し遂げる—

博第 11 号 金 英花

博士号に対する漠然とした目標意識は中国の学部卒業の時から持っていました。「いつかは博士号をとらなければ」と考えつつも、具体的な関心分野がないこともあって、当時はとにかく社会に出て色々なことに挑戦し、経験して見たかったです。

その後、韓国で仕事をしながらも、なぜか不安で学業だけは手放すことができませんでした。結婚、子育て、公務員への挑戦など、人生で何回もの節目を迎えますが、そんな中でも、途切れ途切れで勉強はし続けました。国際協力専門公務員という仕事柄、海外に出張することも多く、異文化や違う国の様々な階層の人たちと接する機会も増え、客観的な視点から自分の業務や各国の施策を見比べることができました。現場での業務を通じて常にいろいろな問題意識と直面し、それを解決するために理論的な研究が必要と切実に感じました。特に国内の外国人問題や多文化共生に強い関心を持つことから韓国の大学院では「地方自治体の多文化共生政策韓日比較研究」というテーマで修士論文を書きました。

宇都宮大学博士後期課程での4年間は自分の知的好奇心を解決してくれたのもっとも充実して、貴重な時間でした。博士論文ではそれまでの行政側の視点から脱皮して外国人の視点からグローバル化が加速している中、人の移動がもたらす問題点、即ち国を跨る人たちの生活の実態と現実を明らかにし、受け入れ国や送り出し国はどのように対応すべきであるかを発信しようと努めました。

各発表会やゼミを通じて同じ問題意識の下で各分野の専門家が集まり、発表や議論を通じて違う分野からの視点も垣間見ることができました。特に各先生方には親身になって時には厳しく、時には優しく、常に適切なお指摘とご助言を頂き、感謝の念に堪えません。そして、学会や研究会に出ることは自分自身の視野を広げ、新鮮な知的刺激を受けるだけでなく、研究者にとって、もっとも大事な学会発表の仕方や、質問の仕方等について学ぶ良い機会でもありました。

最後の本論文を書く段階では「寝ても起きてもこれほど一つのことについて強く、長く、深く思い続けたことがない。」ほど、まさに論文に恋するような不思議で、強烈な思いで、考えの倉の中に閉じこもって毎日を過ごしました。ゆえに完成した時の解放感と成就感はそれまでは経験したことのない大きな達成感でした。研究の醍醐味、面白さも少しずつ理解できるような気がしました。

博論を通じての心得は次の3点です。

一つ目に、本気で臨めば必ず成し遂げるということです。本気でしていると、周りからもたくさんの誰かが助けてくれます。いくら先の見えないトンネルもその道を通った人がいますので、自分の力を信じて本気で向き合ってください。止まることなく進み続ければいつかは通り抜ける時期がやってきます。

二つ目に、メンタルと日常生活のバランスを調整することです。博論を書くうちに孤独

を感じたり、自信をなくしたり、大変だと思える時があると思いますが、自分の場合は常に2月の最終発表会に立つ自分の姿を想像しながら、今を乗り越えれば微笑が待つとイメージトレーニングを行いました。バイトはだめだという人もいますが、私の場合は気持ちの切り替えと、生活とのバランスをとることができて、より一層時間を大事にして論文に邁進することができたと思います。でも、さすが、最後の2ヶ月間は何をしても論文のことが気になって、仕事も手につかず、殆ど毎日パソコンの前でした。

三つ目に、学問を極めることへの理解というか、何故自分が今ここでこれをやらなければならないかという自問に対して、私は勝手に今自分が目指す道は人類の進化の過程で到達できる最高の知識労働であると、誇りを持ってやってもいいと自分自身に動機を付与しました。私の好きな言葉の中に「読書は、充実した人間をつくり、談話は機転のきく人間を作り、書くことは正確な人間をつくる」（英国の哲学者・ベーコン）がありますが、いろんなことを経験しながら、結局どの分野でもトップに行けば行くほど、ある懸案に対して自分で考え、文章でまとめて、それを分かりやすく人に伝えることに帰結するという事に気づきました。談話や書くことへの精進は、いろいろな場面で正確に物事を処理する能力を持つことができるようになることであって、時代が変わろうとも「文」を極めることは同じことであると思います。

博士後の進路：

2014年5月1日付宇都宮大学基盤教育センター特任助教

- ・研究室：国際学部1階の学部長室の隣
- ・伝言：どんなに些細なことでも構いませんので、いつでも気軽に研究室のドアを叩いてください。
- ・心が強くなるお勧めの本(この2年間常に横において読んでいました。)
稲盛和夫『生き方：人間として一番大切なこと』、サンマーク出版、2013年
吉原真理『アメリカの大学院で成功する方法：留学準備から就職まで』、中公新書、2004年（日本に来たばかりの時、博士懇親会で土屋博士からの推薦図書）
その他：『孫子兵法』、『三国志』

(国際学研究科 博士後期課程 国際学研究専攻 第4期修了生)

(2014年3月31日原稿受理)

海外留学今昔 10 第35号から国際学部出身者および在学者を中心とした海外留学体験の寄稿をお願いしたコーナーを設けました。自薦・他薦を問いませんので、**海外留学経験者**および**海外留学中の在学者の積極的な情報提供**を事務局にお寄せ下さい。

「台湾・国立政治大学」

齋藤百香

こんにちは、国際学部国際社会学科 3 年の齋藤百香です。2013 年の 8 月から、台湾の国立政治大学に一年間の交換留学中です。政治大学に関する情報と、留学生活の中で私自身が感じたことについてシェアさせていただきたいと思います。

国立政治大学は、台北郊外に位置するため台北中心部のようなにぎやかさはないものの、大学の周りには生活に不便しない程度の商店や施設があります。私は大学寮の四人部屋に住んでおり、当初は中国、ブラジル、韓国、スロバキア、ロシアからのルームメイトとの生活に全く馴染めませんでした。しかし今では帰宅後の、ルームメイトたちとの時間は生活に欠かせないものとなっています。

授業に関してですが、私の場合ははじめての半年間は付属の語学学校で一日三時間の中国語だけを学び、後半の半年間はそれに加えて学部の授業をいくつか選択しています。中国語は初め読めず聞き取れず苦労しましたが、危機感を覚え勉強しいつの間にか生活に苦労しない程度になっていました。しかしまた、大学の中国語の講義をもっと大切にしておくべきだったとも痛感しました。

海外の学生との交流、中国語の習得等々は、主に私が留学生活に期待していたことです。自分と異なる考え方はとても刺激的だし、日常生活の中で中国語や英語を使って意思表示をする機会は確かに留学生活ならではのものです。しかしそれ以上に、留学の中で自分と向き合う時間が増えたことは予想外の収穫でした。新たな環境におかれたとき、自分はどうか行動するのか、困難に遭遇したときどう努力するのか。生活の中での出来事は自分について客観的に見直すきっかけになりました。そこからさらに自分の考え方に不足している部分や、自分で気づけなかった興味関心を知りました。これは私にとって留学生活における最大の獲得であったように思います。

正直なところ、おそらく語学に関しては留学しなくとも努力次第で習得できるのであり、留学は努力するための危機感を与えてくれる一つのきっかけに過ぎないと思います。それよりも、これから留学に行かれる方々は、留学先では一見興味のなさそうな活動や環境にも入って見ることを強くお勧めします。日本での大学生活は友達との関係、バイトで毎日が忙しく充実する反面で自分を振り返る時間が足りていなかったのかも知れない、というのは私自身の経験に過ぎませんが、皆さんの中にもそのような人も少なくないのではと感じます。

稚拙な文章ではありますが、何かの参考にしていただければ幸いです。

(国際学部 国際社会学科 3 年生)

(2014 年 4 月 20 日原稿受理)

フォーラム 2014 年の皐月を迎えて、皆様忙しいことと思います。(原稿集めに苦労しています。) 今回は記念特集のためにお休みです。

お知らせ

宇都宮大学本部より、第3回ホームカミングデー開催の日時案が決定されました。平成26年大学祭開催期間中(平成26年11月22日(土))に開催決定)。皆様、手帳に予定を加えていただきますようお願い申し上げます。そして、数多くの同窓生が参集することを祈念しています。

EU支部だより

第38号からイタリア在住の松原真実子さんによる知求会EU支部だより「Newsreel World」を発行してきました。今回の第10号の内容は、1 イタリアに「頭脳流出」の波— 景気後退で描けぬ若者の未来— 2 EU支部だより「Realta' Aumentata - per la comunicazione di prodotto」についてです。配信方法は、画像が掲載されているために別便で配信します。ファイル容量が大きいことで、ニュースレターが受信できない場合にはその状況をお知らせください。

連絡事項

編集作業および会員名簿の管理に追われて、今回もフリーメールへのメーリングリスト移管作業を終えることができませんでした。ヤフーグループのサービス停止が近づいていますので、しばらくご不便をお掛けしますが、よろしくお祈りします。

編集者のひとりごと

●今回は第50号発行記念特集として、鯨井先生と北島先生、そして石澤先生には多忙中にもかかわらず寄稿していただき感謝申し上げます。大学院国際学研究科は16年目、国際学部は創立20周年を迎えるに当たり、原点を振り返り、今後の展開を考える意味で大いに内容の充実した紙面になったのではないかと密かに自負しています。まだまだ、他の同窓会のような活発な活動はできていませんが、「継続は力なり」を肝に銘じ末永く発行していきたいです。

次号から留学生が数多くいる当会として、新たな紙面を中国語圏および韓国語圏を視野に入れて、編集委員または編集アドバイザーを組織化して、編集を展開して行きたいと考えています。ぜひ、留学生の会員の中から自薦・他薦を問わず、編集に新たな視点を加えるためにご協力およびご連絡いただければ幸いです。

編集後記：2010年4月26日から **知求会ニュースのバックナンバー**は **国際学部同窓会 HP** (<http://afis.jp>) で見られるようになっていきます。

同窓会会員の皆様へのお願い：**住所、勤務先および携帯電話番号、メールアドレスの変更の際は事務局へメールして下さい。** chikyukai@freeml.com